

# ‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις ὁ βίος, ὑπόληψις.’

108号 1996.8.2

文・編集・発行

恋 怪子

## TAPE: 眼球駆楽舞『黄泉の時間』



photo by k.k.

テープはタイトルにもなっている『黄泉の時間』ではじまる。

速くで鳴っている目覚し時計のベルの音にかきかたて、ゆっくりと鐘の音が鳴り響く。まもなく、まるで大時計が時を刻むかのようにドラムの音がリズムを刻みはじめる……。もうここで感じる。これから開かれていくのが、「時間」という空間であるということ。そして、ギターが「時間」の扉をパーンと開ける。そこに開かれたのが眼球駆楽舞の新しい「時間空間」。やがて、山川ひでろうのヴォーカルがはじまる。

後見も無く時間は進む／時間の影に何時も日が暮れる  
やけに踊る不確かな俺は／また別の自分を身籠る  
殺せ黄泉の時間／俺の体は人間だらけ  
こいつらを自由に走らせる／扉を開ける為には  
何より時間が必要

『黄泉の時間』(8曲入り)



## BOOK: 福島 英『決定版・実力がつくヴォーカル入門』

- 私たちが海外のヴォーカリストの歌に感動するのは、ことばの意味よりもむしろ、声の音色、声のひかかりや息など、メロディによって伝わり、心に働きかけてくる声そのものの魅力によるところが大きいと思います。
- 偽りの声から人の心を打つ表現がうみだせるわけがないのです。一番悪いのが、人の声の真似です。ヴォーカリストの場合、一人ひとり、楽器が違います。声質も違うし、歌いたい世界も違うのに、声そのものの質を真似ていくと、どこかで弊害がおきてしまいます。
- 歌は、虚構の世界ではありませんが、それによって人が感動するのは、全身を使った表現を突き破って、真実リアリティが現れ出てくるからです。それは全くごまかせない、シビアな世界です。声を使うという確かな技術に支えられて、はじめて可能なことなのです。
- ヴォーカリストはただ歌えばいいというものではありません。人の心を動かさないのなら、わざわざ歌う必要はありません。それなら歌うよりも話したほうが、よっぽど伝わるというものです。歌ったがために伝えたいメッセージを殺してしまうのであれば、歌わない方がよいわけです。ことばに音声イメージ、メロディ、リズムがかわることによって、より豊かに表現できるからこそ、歌う意味があるのです。声そのものの状態・性質・体の使われ方でも何かを感じさせることはできます。それがしっかりしてはじめて、歌でより多くのことを伝えることができます。
- 歌は、聞く人の感情がゆり動かされて、はじめて歌といえるのです。自分なりの表現で伝えようとするヴォーカリストなら、その基礎力のうえにオリジナリティが出てきます。それは、うまいとか下手とかの問題ではなく、まずはその人が勝負できる世界、他の人には絶対に真似できない世界が確実にあるということなのです。
- 歌にはテクニックだけでなく、その人の持つ声、雰囲気、ひいては人格、生き方など、その人を取り巻くあらゆる要素が反映されます。



「声」というのは人間の肉体から生み出されるものである以上、とても正直にその人間の内面を反映させる。簡単に言ってしまうと、人の心と肉体に入り込んでくる「声」か、人の心と肉体の上を流れていく「声」か、ということになるのだろう。トム・ヴァーラインの『声』は、絶妙不良の金属製コイルみたいに、幾重にも振じ曲がり、震えつばなしだ。まず歌いたいという欲求があり、その前まで歌い込まず、あえぎもくくりに滲透して、それで喉から嘔吐のように吐きだす叫びを吐き続ける。彼の姿がある。歌うという行為は、たしかに「表現」であるのだが、絶えることのない「自問」ともいえるのだ。そして、その自問する姿が、「声」として伝わってくる。ぼくたちは彼の言葉ではなく、その姿勢に揺り動かされるのだ。もし君がこの世界に生きていくのに「詩」を必要とするのなら、まず君が「詩」にならなければならない。まず君が「世界」にならなければならない。

そうだ、やはり、「時間」だ。この『黄泉の時間』を何回か聴いていたら、ジャン・コクトーの『オルフェ』でジャン・マリエ扮するオルフェが両手を前にのぼして鏡をぬけていく場面が浮かんできた。鏡の向こう側は眼球駆楽舞の「時間空間」。山川ひでろうはその鏡の向こう側からこの世の現実を見つめているにちがいない。あ、そういえばオルフェは、蛇に咬まれて死んだ妻を迎えに黄泉の国(冥界)に行くのだった……。なんという不思議な暗合。

山川ひでろうは、真の時人はみなそうであるが、自分自身の「時間」というものを獲得している。その「時間」のなかで時を産み出す。そして産み出された時が、歌われる(ヴォーカルになる)ことでより深く伝わるように、眼球駆楽舞が見事な音楽にして力強くその後押しをしている。山川ひでろうに貸りた福島英・著『決定版・実力がつくヴォーカル入門』を読んで、ヴォーカルについて目を見開かされる思いがした。

この本はヴォーカリストのための入門書で、大部分はヴォイス・トレーニングの具体的なやり方について書かれているのだが、トレーニングの基礎になっている「ヴォーカルとは何か」、「歌とは何か」、「声とは何か」という本質的な理論は、聴く側の「どうして感じる歌と感じない歌があるのだろうか? 何がちがうのだろうか?」という疑問に対する明快な解答にもなっている。

「ヴォーカリストはただ歌えばいいというものではありません。人の心を動かさないのなら、わざわざ歌う必要はありません。それなら歌うよりも話したほうが、よっぽど伝わるというものです。(略)ことばに声イメージ、メロディ、リズムがかわることによって、より豊かに表現できるからこそ、歌う意味があるのです」(左下参照)

とあるが、たしかに「歌うよりも話したほうが、よっぽど伝わる」、「歌う意味」のないような歌がたくさんあって、そういう歌を聴くと、「ことば」(歌詞=詩)に問題があるのだということもわかって、「声イメージ、メロディ、リズム」、とくに「声イメージ」にも問題があるのだということはこの本を読むまでわからなかった。

眼球駆楽舞の2nd Tape『黄泉の時間』を聴くと、第一にヴォーカルが以前にくらべると格段とよくなって、歌詞がよく聴きとれるようになっていくことがわかる。

「詩」を産み出す自分自身の「時間」というものはもうすでに獲得している山川ひでろうが、自分自身の「声」も着実に獲得しつつある。

演奏も変化に富んで深みが増して聴きやすくなった。そして、それによって山川ひでろうの詩の世界が、それは新曲『黄泉の時間』と『狩人の休日』にいちばん感じられるが、より深くしみこんでくるのである。

まさに「ことばに声イメージ、メロディ、リズムがかわることによって、より豊かに表現できるからこそ、歌う意味がある」歌、「人の心を動かせる」歌になっている。

「よくにとってロックとは「声」である。極言すれば、歌われている内容なんてどうでもいい」

という文ではじまる比留間久夫のエッセイ「君が『詩』になること」は、『決定版・実力がつくヴォーカル入門』に書かれている「声」と「歌」を、聴く側からみごとに書き切っている。

「簡単に言ってしまうと、人の心と肉体に入り込んでくる『声』か、人の心と肉体の上を流れていく『声』か、ということになるのだろう」

私は、「この世界に生きていくのに『詩』を必要とする」。ならば、自分が『詩』に、『世界』にならなければならないということだ。だから、歌を聴く。

## ESSAY: 君が『詩』になること

比留間久夫

よくにとってロックとは「声」である。極言すれば、歌われている内容なんてどうでもいい。ラジオから音楽が流れてくる。自然に「声」に耳がゆく。判別は一瞬にして、からだのどこかで、行なわれる。それが、よくにとって必要な「声」か、どうでもいい「声」か、むろん、これは個人的な領域だ。その人間が生きていくのに何を「声」として必要としていくかで、ちがってくるだろう。列記していくと、トム・ヴァーライン(テレヴィジョン)、マーク・ボラン(T・レックス)、ジョン・レノン、ジョン・ライオン、デヴィッド・ボウイ……。このほかに、まだ多くの知らないたくさんの「声」があるのかもしれないが——何しろこの十年間、ぼくは積極的にロックを聴いていないし、もしあるんだら教えてほしい。「声」というのは人間の肉体から生み出されるものである以上、とても正直にその人間の内面を反映させる。簡単に言ってしまうと、人の心と肉体に入り込んでくる「声」か、人の心と肉体の上を流れていく「声」か、ということになるのだろう。トム・ヴァーラインの『声』は、絶妙不良の金属製コイルみたいに、幾重にも振じ曲がり、震えつばなしだ。まず歌いたいという欲求があり、その前まで歌い込まず、あえぎもくくりに滲透して、それで喉から嘔吐のように吐きだす叫びを吐き続ける。彼の姿がある。歌うという行為は、たしかに「表現」であるのだが、絶えることのない「自問」ともいえるのだ。そして、その自問する姿が、「声」として伝わってくる。ぼくたちは彼の言葉ではなく、その姿勢に揺り動かされるのだ。もし君がこの世界に生きていくのに「詩」を必要とするのなら、まず君が「詩」にならなければならない。まず君が「世界」にならなければならない。

(ロック・オリジナル歌集『黄泉の時間』には「黄泉の時間」も収録)